

激浪に向かう

自動車リサイクル次の10年

2 □

—今後の自動車リサイクル部品業界をどう見ている

「これまで使用済み車から取り外した部品をクループの在庫共有システムに登録すれば自動的に売れた。業界の発展を促したこのビジネスモデルは、今後は通用しなくなる。同じクループ内においても、部品の売り方、顧客との関係の作り方などでそれぞれの事業者の個別努力が求められる。その傾向が強まる」

—政策的にはリユース部品が注目されている

「環境行政の面でもリユースについての要求は高まっており、従来の3Rではなく、ゴミの削減(リデュース)と再利用(リユース)の2Rに力を入れる方向にある。リサイクルは資源循環になるのだが、それ以前の段階として2Rに努め、環境負荷低減を目指しているのだと思う。また、欧州では二酸化炭素

(CO₂)削減が一段とうるさくなった。リユース部品は周知のようにCO₂低減につながる。こうしたバックグラウンドを踏まえて、業界発展のために次ぎの手を打つ必要がある」

—具体的なアイデアは

「自動車長く使われたいよ」となった。事故車のすべてを新品部品で直すのではなく、年

枠組み超えた競争と協調を

「保有構造の変化にともなう、仕事を積極的に受注するた

「整備業者に対しては、一整備業者に対しては

「高度化事業は今期、リ協を中心に取り組むことになった。まず、実際の修理で新品部品とリユース部品、さらに板金修理がどのようなウエイトになっているかを調査する。これまでなかったデータで、これを把握することでリユース部品のシェア拡大につなげる。同時にリサイクル部品の利用マニュアルを作成する。リユース分の活用範囲を広げること役立てる」

「整備業者から低グレード品を新品部品で行っている。これが保険会社の負担になり、結局は保険料を引き上げることになる。ユーザー負担を増した。こういう状況を改善するためにリユース部品の利用を真剣に考え始めたよ」

「整備業者から低グレード品を新品部品で行っている。これが保険会社の負担になり、結局は保険料を引き上げることになる。ユーザー負担を増した。こういう状況を改善するためにリユース部品の利用を真剣に考え始めたよ」

「整備業者から低グレード品を新品部品で行っている。これが保険会社の負担になり、結局は保険料を引き上げることになる。ユーザー負担を増した。こういう状況を改善するためにリユース部品の利用を真剣に考え始めたよ」



日本自動車リサイクル部品協議会

清水 信夫会長

事業者個別の努力が必要

界に求められていることは

「クループの枠組みを超えた競争と協調が必要だ。事業環境が大きく変わろうとしており、要請に応えることができる事業者は限られる。さまざまな情報をリ協会員に提供するので、できることは自社の判断で対応をとって時代の流れに乗ってほしい。日本は高品質なリユース部品を調達できる国はない。これを海外に輸出するのではなく、業界が協調して国内市場での利用拡大につなげたい」

記者の目

品質基準の統一が、担保

業界や整備業界との話し合いのテーブルを作る原動力になった。リユース部品の国内市場をもう一段拡大するには、一新品部品とリユース部品のすみ分けが必要になる」という。この理屈を市場に定着させるにはユーザーの支持を得ることがカギ。このためにリサイクル部品業界自身が努力を重ねる必要がある。

(論説委員 青山 信一)